

「社会情報調査の方法に関する研究会」 通算 10 回の開催達成

井上 芳保

■ 1997 年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」について

1997 年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」の第 9 回は 1 月 31 日、大阪市立大学文学部助教授の谷富夫さんをお招きして開催することができた。谷さんは都市社会学と宗教社会学を主に専攻とされており、これまでに「本土」へ出た沖縄出身者の那覇都市圏への U ターン現象、関西を中心に展開されているいくつかの新宗教現象、さらに在日朝鮮人の日常をめぐって発生している様々なエスニシティ問題等々に関して優れたフィールドワークを重ねておられる。またライフヒストリーの研究方法に関する啓発的な入門書『ライフヒストリーを学ぶ人のために』を近年編集されている。

今回、私は谷さんがこの『ライフヒストリーを学ぶ人のために』に巻頭論文として書かれた「ライフヒストリーとは何か」という論文に強くひかれるものを感じ、エピファニー（その人にとって人生におけるきわめて重要な転換の契機）という概念などを中心として聞き取り調査の可能性について話して欲しいと依頼した。谷さんは入念なレジュメと資料を用意の上、「エスニシティ研究における「世代間生活史法」の試み」という題で話して下さった。谷さんが一時期、参与観察の意図をもって大阪府下の在日の方々が多く居住する地域に敢えて住んでみたことがあるという話には驚いた。

当日は本学教員ばかりでなく、北海道大学、北海道教育大学、札幌大学などからも研究者や大学院生が訪れた。質疑応答の時間をたっぷりとったことも幸いして、さまざまな観点の意見が出され、たいへん盛り上がった。今回ここに掲載するのは当日の報告内容をもとに新たに書き下ろしていただいた論文である。あまり時間がなく、無理なお願いだったにもかかわらず、快く執筆を引き受けて下さり、このようにすぐれた論考を本誌のために提供して下さいました谷さんには改めて感謝申し上げる次第である。

なお、1997 年度分の「社会情報調査の方法に関する研究会」はあと一回の開催が予定されている。すなわち第 10 回として、来る 3 月 3 日、関西学院大学社会学部教授の大谷信介さんをお招きして「都市的状況と友人ネットワーク — 5 大学比較調査の結果から」と題して行われることが予定されている。

■ 1996 年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」について

ところで、1996 年度分の企画の話になるが、第 8 回は、去る 1997 年 3 月 8 日、同愛記念病院看護学院講師の山崎晶子さんをお招きして「差別のエスノメソドロジーから Media Space project へ」として行われた。やはり他大学から多くの参加者を得て行われ、たいへん盛会となった。

特に前半部分ではビデオ映像を通して実際の日常的コミュニケーション場面を取り上げ、何気ないしぐさの中に潜む差別的関係性を発掘しようとするたいへん刺激的でしかもわかりやすい報告がなされた。

例えば、私には車椅子の「障害」者が介助者と共に買い物に行った際に、「障害」者との会話であるにもかかわらず、店の人の視線がその「障害」者ではなくて専ら介助者の方に向けられているシーンを捉えた画像についての鋭い言及などは未だに特に強く印象に残っている。山崎さんは好井さん流の「差別のエスノメソドロロジー」を批判し、その差異を強調した上で、Media Space projectの方へと話をもっていかれたようなのだが、申し訳ないことに私には山崎さんの提示した「差別のエスノメソドロロジー」の好井さんと共通する鋭さや面白さばかりが記憶に残っている。

今回、残念ながらその記録を載せることはできなかった——山崎さんは当日の報告のテープ起こしをすることについては固く拒絶された——が、報告者の山崎さんは本学の是永論教員と一緒に Media Space project に関わる仕事をされているとのことであり、また何らかの形で本学に来て下さることもあろうと思われる。そのときを楽しみにしたい。

■ 「社会情報調査の方法に関する研究会」通算10回の開催達成にあたって

ところで「社会情報学部基礎研究プロジェクト」として予算を確保し、1993年度より年二回のペースで行われてきたこの「社会情報調査の方法に関する研究会」も今年度で計10回を数えることになる。毎回、多くの参加者を得て札幌圏在住の社会学研究者たちに貴重な機会を提供することができているようなのを嬉しく思う。またこの企画の実施にあたっては遠方から来て下さった報告者の方々はもちろん、この間、実に多くの方のお力添えをいただいた。重ねて感謝申し上げたい。

通算10回の開催。これで一区切りついた感もある。その意味でこれまでの企画の一覧を以下に掲げておくこととする。振り返ってみると様々なテーマと方法についての報告を聞くことが出来た。エスノメソドロロジー、自由回答データの処理、明治期を捉えるカルチュラルスタディーズ、比較考察に際してのデータ加工の手法、オウム報道に典型的に現れたマスメディアに関わる問題群の考察、そしてライフヒストリー研究という方法の有する魅力等々、社会情報調査というものに含まれるいろいろな潜在的可能性を我々は研究会の度に意識させられてきた。

「社会情報調査実習」を必修化した3年生の新しいカリキュラムもいよいよこの4月からスタートする。学生諸君が大学の外に出てフィールドワークを実践してみることには計り知れない効用があると思われる。自分の眼で現実の人間に直面してみる体験は社会情報学の教育にとって大切なものといえよう。そのような意味合いからもこの「社会情報調査の方法に関する研究会」の成果は有形無形さまざまな形で我々の研究・教育に役立つこととなろう。これからはさらに面白い企画を重ねていきたいと考えている。この研究会に対する一層のご支援をお願いしたい。

「社会情報調査の方法に関する研究会」一覧

	実施日	報告者	報告テーマ	記録
第1回	93年 6月 4日	大石 裕	「地域情報化研究の課題」	
第2回	93年 7月29日	好井 裕明	「意味と社会システム：螺旋運動としてのエスノメソドロジー」	紀要3巻2号に論文掲載
第3回	94年 7月28日	高橋 和子	「非定型データの分析方法」	紀要4巻2号に論文掲載
第4回	94年10月 7日	吉見 俊哉	「国民祭典論のための序論的考察：運動会の思想」	
第5回	95年 7月 1日	瀬地山 角	「東アジアの家父長制」	紀要5巻2号に講演録掲載
第6回	95年12月16日	松田 博公	「オウム報道の構図と問題点」	紀要5巻2号に講演録掲載
第7回	96年11月 7日	亘 明志	「メディアと権力」	紀要6巻2号に講演録掲載
第8回	97年 3月 8日	山崎 晶子	「差別のエスノメソドロジーからMedia Space projectへ」	
第9回	98年 1月31日	谷 富夫	「エスニシティ研究における「世代間生活史法」の試み」	紀要7巻2号に論文掲載
第10回	98年 3月 3日	大谷 信介	「都市的状況と友人ネットワーク：5大学比較調査の結果から」	